広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	片仮名の仮名文字遣い : 前田本色葉字類抄と親鸞自筆『西方指南抄』を資料として
Author(s)	土肥, 新一郎
Citation	論叢 国語教育学 , 16 : 68 - 78
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50697
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050697
Right	
Relation	

片仮名の仮名文字遣い―前田本色葉字類抄と親鸞自筆『西方指南抄』を資料として―

土肥　新一郎

一　本稿の目的

かつて、平仮名及び片仮名には一つの音節に対し、複数の変体仮名が存した。それらの用い方を、本稿では「仮名文字遣い」と呼称する。

仮名文字遣いを明文化したものは、古くは鎌倉期から江戸期にかけて成立した仮名遣書、歌学書の類に見られる。[1] これらには、「上―下」（「語頭―非語頭」と置き換えられるか）を基準とする使い分けに関する記述が見られる。

「上―下」を観点とした平仮名の仮名文字遣い研究は、安田（一九六七）をはじめとして多くなされてきた。[2] 一方で、片仮名の仮名文字遣いを報告したものは、管見の限り、犬飼（一九八九）、樋野（一九九〇）（一九九一）[3]の研究にとどまる。

犬飼（一九八九）の研究では、次の引用のように、大福光寺本『方丈記』（奥書には、寛元二年（一二四四）写とある）を資料とし、仮名文字遣いを明らかにした。引用中の「／／」は、本稿での「〈〉」[4]と同意である。また、引用中の「ホ」と「呆」は、それぞれ本稿の〔ホ〕と〔呆〕と同意。なお、「呆」について、実際には「呆」の払いの部分のない字形で印刷されていたが、引用では便宜上「呆」とする。

／キ／／サ／／リ／の字体は、常用のもの以外はそれぞれ一例にすぎない。その使用にも特別な意図はうかがわれない。／キ／の場合は別の字体と意識されていたかどうかも不明である。しかし、／ホ／の字体は、「ホ」が常用で、その三分の一ほどの数の「呆」が用いられている。「ホ」は語頭にも語中尾にも用いられるが「呆」は必ず語頭に用いられる。例えば「潮」は「シホ」、「程」は「呆ト」と書かれている。これを「仮名文字遣」風に言えば、「上にかく呆」ということになる。（二一頁）

犬飼（一九八九）の研究によって一三世紀半ばの文献に、「上―下」を基準とする片仮名の仮名文字遣いが確認されたことになる。

これを受けて、新たな課題として、次の二点が挙げられる。

①同時期の他文献の音節〈ホ〉に「上―下」を基準とする仮名文字遣いが見られるか確認する。

②同時期の他文献の〈ホ〉以外の音節に「上―下」を基準とする仮名文字遣いが見られるか確認する。

以上、この二点を本稿の目的とする。

二　対象資料について

対象資料を前田本色葉字類抄と親鸞自筆『西方指南抄』とする。

前田本色葉字類抄は、鎌倉初期に書写されたと考えられている。現存するのは「巻上」「巻下」の二帖で、「巻中」を欠いている。なお、「巻下」

には欠落がある。「由」の一部、「女」、「美」、「師」の一部が欠落している。

この資料では、片仮名は主に、漢字で表記される見出し語の音や訓を記すために用いられている。これらの片仮名を調査対象とする。

なお、本稿では、前田育徳会編『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』(勉誠社、一九八四)の影印画像を用いる。

親鸞自筆『西方指南抄』は、親鸞が八四歳から八五歳(一二五七-一二五八)にかけて書したものであると考えられる。本書は、上(本・末)、中(本・末)、下(本・末)の六巻で構成されている。

本行は、墨筆の漢字と片仮名で構成されている。訓点は片仮名で表記され、墨点と朱点の二種存する。朱点は墨点を補った部分があり、また重なりを避けた箇所があるため、墨点・朱点の順に加点されたものと思しい。これらを踏まえ、本稿では、本行の片仮名及び、墨点の訓点を調査対象としたい。

なお、本稿では、赤松俊秀ら編の『親鸞聖人真蹟集成』第五巻(法蔵館、一九七三)及び第六巻(法蔵館、一九七三)の影印画像を用いる。

三　研究の方法

本稿で対象とする音節は、〈キ〉と〈ホ〉とする。

〈キ〉については、本稿の対象とする両方の資料において、二字体が存し、また、用例数が確保できるため選択した。

この〈キ〉と〈ホ〉について、単語内のどの位置にどの字体が用いられるかを集計する。単語内の位置として「語頭」と「非語頭」を設定する。「非語頭」に関しては、必要に応じて「語中・語末」や「形態素頭・非形態素頭」の区別をおこなう。「形態素頭」とは、一単語をさらに複数の「まとまり」に分けた、その「まとまり」の「先頭文字」を意味する。この「まとまり」の認定に関して、『日本国語大辞典 第二版』に示される、見出し語の構成を示すハイフンを参考にする。

なお、一音節語はそれが語頭であるか否か判断しがたいため「一音節語」として立項する。

以上の手順を踏まえ、各調査対象の各音節について、「上」と「下」の範囲と、それぞれに用いられる字体を明らかにする。

四　前田本色葉字類抄の〈キ〉の仮名文字遣い

前田本色葉字類抄(以下、色葉字類抄)の音節〈キ〉の調査対象範囲を、巻上の「伊」「呂」「波」、巻下の「古」「江」「手」「木」とし、サンプリング調査をおこなう。「木」については、語頭の用例が偏ることが予想されるため別に立項して調査する。便宜上、以上の対象範囲をそれぞれ「巻上」「巻下」「木」と呼称する。

色葉字類抄の〈キ〉には、後掲の表1ように二字体存する。これらは、「巻上」、「巻下」、「木」のすべての対象範囲においてみられた。

この二字体について、後掲の表2で〈キ〉の二字体の用例数を、「巻上」、「巻下」、「木」に分けて示した。多く用いられた方の字体に網掛けを施した。

表2より、〈キ〉の二字体について、巻ごとに主に用いられる字体が異なることがわかる。

そのため、以降では、これらの二字体がどのように用いられているかを、「巻上」、「巻下」、「木」をそれぞれ分けて述べる。

後掲の表3は「巻上」の〈キ〉について、単語内の位置(語頭、非語頭)と一音節語を項目として設定し、それぞれの用例数を示したものである。非語頭については、それが形態素頭であるか否かを区別した。一五%以上のものに網掛けを施した。また、一五%未満のものについて、各項目

において二字体の用例数を比較した際、もう一方よりも多い場合は、それに網掛けを施した。

表3より、〔キ〕は、非語頭の非形態素頭に多く用いられていることがわかる。一方、〔|〕では、単語内の位置を問わず用いられている。

このことから、「巻上」の〈キ〉では、「上―下」を基準とする仮名文字遣いがなされているといえる。「上」は語頭と非語頭の形態素頭が該当し、主に〔|〕が用いられ、「下」は非語頭の非形態素頭が該当し、〔キ〕と〔|〕が併用される。

後掲の表4は「巻下」の〈キ〉について、表3と同様に作成した。

表4より、〔キ〕は単語内の位置を問わず広く用いられている。一方、〔|〕は、主に非語頭の非形態素頭に用いられており、語頭、非語頭の形態素頭ではあまり用いられない。

このことから、「巻下」の〈キ〉では、「上―下」を基準とする仮名文字遣いがなされているといえる。「上」は語頭と非語頭の形態素頭が該当し、主に〔キ〕が用いられ、「下」は非語頭の非形態素頭が該当し、〔キ〕と〔|〕が併用される。

後掲の表5は「木」の〈キ〉について、表3と同様に作成した。

表5より、〔キ〕は単語内の位置を問わず用いられる。一方、〔|〕は用例数が非常に少なく、非語頭の非形態素頭に用いられる一例のみが確認できた。

以上のように、巻によって〈キ〉の仮名文字遣いが異なった。

前田本色葉字類抄の〈キ〉の仮名文字遣いは、次のようにまとめられる。

「巻上」:「上」(語頭・非語頭の形態素頭)…〔|〕
　　「下」(非語頭の非形態素頭)…〔キ〕〔|〕
「巻下」「木」:「上」(語頭・非語頭の形態素頭)…〔キ〕
　　「下」(非語頭の非形態素頭)…〔キ〕〔|〕

五　前田本色葉字類抄の〈ホ〉の仮名文字遣い

色葉字類抄の音節〈ホ〉の調査対象範囲を、巻上と巻下のすべてとする。巻上に属する「保」については、語頭の用例が偏ることが予想されるため別に立項して調査する。便宜上、以上の対象範囲をそれぞれ「巻上」「巻下」「保」と呼称する。

色葉字類抄の〈ホ〉には、後掲の表6のように二字体存する。これらは、「巻上」、「巻下」、「保」のすべての対象範囲においてみられた。

この二字体について、後掲の表7で〈ホ〉の二字体の用例数を、「巻上」、「巻下」、「保」に分けて示した。多く用いられた方の字体に網掛けを施した。

表7より、「巻上」、「巻下」、「保」のすべてにおいて、〔呆〕が主に用いられ、〔ホ〕はあまり用いられないことがわかる。

音節〈キ〉においては、巻によって仮名文字遣いが異なった。そのため、以降では、これらの二字体がどのように用いられているかを、「巻上」、「巻下」、「保」をそれぞれ分けて述べる。

後掲の表8は「巻上」の〈ホ〉について、表3と同様に作成した。

表8より、〔呆〕と〔ホ〕は、単語内の位置を問わず用いられている。このことから、「巻上」の〈ホ〉において、「上―下」を基準とする仮名文字遣いはなされていないといえる。

後掲の表9は「巻下」の〈ホ〉について、表3と同様に作成した。

表9より、〔呆〕と〔ホ〕は、単語内の位置を問わず用いられている。このことから、「巻下」の〈ホ〉においても、「上―下」を基準とする仮名文字遣いはなされていないといえる。

後掲の表10は「保」の〈ホ〉について、表3と同様に作成した。

表１０より、想定通り、語頭に用例が偏る結果となった。そのため、「上―下」を基準とする仮名文字遣いを検討することはできない。

以上のことから、〈ホ〉では「巻上」、「巻下」、「保」のすべてを通して、「上―下」を基準とする仮名文字遣いを見ることはできなかった。

六　親鸞自筆『西方指南抄』の〈キ〉の仮名文字遣い

親鸞自筆『西方指南抄』（以下、西方指南抄）の音節〈キ〉の調査対象範囲を、上本・末とする。

西方指南抄の〈キ〉には、後掲の表１１のように二字体存する。

墨筆の本行〈キ〉と墨筆の訓点の両方において、この二字体が見られた。

この二字体について、後掲の表１２で〈キ〉の二字体の用例数を、本行、振り仮名、左注に分けて示した。多く用いられた方の字体に網掛けを施した。

表１２より、本行〈キ〉では、〔キ〕が多く用いられており、〔|〕はあまり用いられない。振り仮名〈キ〉では、〔キ〕が一三〇例存するものの、〔|〕は四〇六例で、〔|〕の三倍以上多く用いられている。左注〈キ〉では、〔|〕が多く用いられており、〔キ〕はあまり用いられない。

このように、本行と訓点とで主に用いられる字体が異なる。本行〈キ〉において、そのほとんどに〔キ〕が用いられていることから、〔キ〕が正式な字体で、〔|〕はその簡略字体であると捉えられていたと思しい。簡略字体である〔|〕を本行では用いてはならず、振り仮名では用いて良いとされたか。

以降では、用例数の確保できる本行と振り仮名において、〈キ〉の二字体がどのように用いられているかを述べる。

後掲の表１３は、本行〈キ〉について、表３と同様に作成した。

表１３より、〔キ〕は、語頭と非語頭において用いられる。一方、〔|〕は、非語頭にのみ用いられる。

このことから、本行の〈キ〉では、「上―下」を基準とする仮名文字遣いがなされていると言える。「上」は語頭が該当し、〔キ〕が用いられ、「下」は非語頭が該当し、〔キ〕と〔|〕が併用される。

なお、非語頭の形態素頭の用例が無いため、これが「上」に該当するか否かについて検討することができなかった。

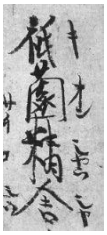
後掲の表１４は、振り仮名〈キ〉について、表３と同様に作成した。

表１４より、〔キ〕は、語頭と非語頭の形態素頭において多く用いられ、非語頭の非形態素頭には比較的用いられていない。一方、〔|〕は、単語内の位置を問わず用いられている。

このことから、振り仮名〈キ〉では、「上―下」を基準とする仮名文字遣いがなされていると言える。「上」は語頭と非語頭の形態素頭が該当し、〔キ〕と〔|〕が併用される。「下」は非語頭の非形態素頭が該当し、主に〔|〕が用いられる。

ところで、振り仮名〈キ〉において特徴的な仮名文字遣いが見られたため、それを紹介する。

次の画像に示すような、一音節の漢字の音〈キ〉を含む用例は、八六例あった（一音節語の用例を含む）。そのすべての用例に〔キ〕が用いられ、〔|〕は用いられない。[5]



「祇園精舎（〔キ〕オンシヤウシヤ）」

「便宜（ヒン〔キ〕）」

これは、漢字一字の音を示そうとする配慮を目的とする仮名文字遣いであると考えられる。ただし、これらの用例の内、三九例は、語頭（一二例）若しくは非語頭の形態素頭（二七例）に該当する。そのため、「上」を示そうとする仮名文字遣いとも捉えることは可能である。

以上のことから西方指南抄の〈キ〉の仮名文字遣いは次のようにまとめられる。

本行：「上」（語頭）…〔―〕
　　「下」（非語頭）…〔キ〕〔―〕
振り仮名：「上」（語頭・非語頭の形態素頭）…〔キ〕〔―〕
　　「下」（非語頭の非形態素頭）…〔―〕

七　親鸞自筆『西方指南抄』の〈ホ〉の仮名文字遣い

西方指南抄の音節〈ホ〉の調査対象範囲を六巻すべてとする。

西方指南抄の〈ホ〉には、後掲の表15のように二字体存する。

墨筆の本行〈キ〉と墨筆の訓点の両方において、この二字体が見られた。

この二字体について、後掲の表16で〈ホ〉の二字体の用例数を、「巻上」、「巻下」、「保」に分けて示した。多く用いられた方の字体に網掛けを施した。

表16より、本行では〔呆〕と〔ホ〕が併用されていると言える。振り仮名と左注においては、主に〔ホ〕が用いられ、〔呆〕はほとんど用いられない。

以降では、二字体が併用されている本行において、〈ホ〉の二字体がどのように用いられているかを述べる。

後掲の表17は、巻ごとに、単語内の位置（語頭、語中、語末）を項目として設定し、二字体の用例数を示したものである。非語頭を、語中と語末に分類するのは、明確な傾向が見られたためである。なお、一音節語に該当する用例は確認できなかった。

二〇％以上のものに網掛けを施した。また、二〇％未満のものについて、各項目において、同巻内で比較した際の用例数の多い場合、それに網掛けを施した。

表17より、各巻の二字体の仮名文字遣いを整理すると次のようになる。

上本：「上」（語頭）…〔呆〕〔ホ〕
　　「下」（語中・語末）…〔ホ〕
上末：「上」（語頭）…〔呆〕
　　「下」（語中・語末）…〔ホ〕

中下（本末）：語頭…〔呆〕、語中…〔呆〕〔ホ〕、語末…〔ホ〕

中下（本末）については、語頭は「上」、語末は「下」となり、語中は「上」と「下」の両方に捉えられていたと考えられる。

中下（本末）の四巻について、これらはそれぞれ同様の仮名文字遣いであると言える。

これらと異なる仮名文字遣いが見られるのは、上本と上末である。この二巻では、語中において〔呆〕が用いられない。また、上本では語頭において〔ホ〕が用いられる。

この二点の違いが語彙の差によるものか否かを検討する。

まずは、上本の語頭の仮名文字遣いの違いについて検討する。

上本において用例数の多い「ホカ」と「ホム」が、他巻において見られるか確認する。この二語について、上本と他巻における二字体の用例数を次に示した。

「ホカ」上本：〔呆〕〇例（〇％％）、〔ホ〕六例（一〇〇％％）
　　他巻：〔呆〕二〇例（七四・一％％）、〔ホ〕七例（二五・九％％）

「ホム」上本：〔呆〕六例（六六・七％）、〔ホ〕三例（三三・三％）
他巻：〔呆〕一三例（一〇〇％）、〔ホ〕〇例（〇％）

「ホカ」と「ホム」の二語は、他巻においても存し、他巻では〔ホ〕よりも〔呆〕が多く用いられることがわかった。

このことから、語彙の差によって、上本と他巻で語頭仮名文字遣いの差が生じたとは言えない。即ち、語頭〈ホ〉において、上本では、二字体を併用し、他巻においては〔呆〕を主に用いるという仮名文字遣いの違いが存すると言える。

次に、上本と上末の語中の仮名文字遣いについて検討する。

上本と上末において用例数の多い「オホシ」、「オホユ」、「オホヨソ」が、他巻において見られるか確認する。この三語について、各巻の二字体の用例数を次に示した。

「オホシ」上（本末）：〔呆〕一例（七・七％）、〔ホ〕一二例（九二・三％）
他巻：〔呆〕一六例（四三・二％）、〔ホ〕二一例（五六・八％）

「オホユ」上（本末）：〔呆〕一例（七・七％）、〔ホ〕一二例（九二・三％）
他巻：〔呆〕一四例（四八・三％）、〔ホ〕一五例（五一・七％）

「オホヨソ」上（本末）：〔呆〕〇例（〇％）、〔ホ〕一〇例（一〇〇％）
他巻：〔呆〕一例（五・三％）、〔ホ〕一八例（九四・七％）

上本、上末において〔ホ〕が主に用いられる。他巻では「オホシ」「オホユ」については、〔ホ〕と〔呆〕が併用されることがわかる。ただし、「オホヨソ」については、上本と上末と同様に〔ホ〕が主に用いられている。「オホシ」「オホユ」の二語について、他巻では二字体の併用が見られたため、語彙の差によって仮名文字遣いの差が見られたとは言えない。

即ち、語中〈ホ〉について、上本と上末では〔ホ〕を主に用い、他巻では二字体が併用されるという仮名文字遣いの違いが存すると言える。

八　本稿の成果と考察

本稿で明らかになった仮名文字遣いを資料ごとに掲出する。

【前田本色葉字類抄】

・音節〈キ〉
「巻上」：「上」（語頭・非語頭の形態素頭）…〔｜〕
「下」（非語頭の非形態素頭）…〔キ〕〔｜〕
「巻下」「木」：「上」（語頭・非語頭の形態素頭）…〔キ〕
「下」（非語頭の非形態素頭）…〔キ〕〔｜〕

・音節〈ホ〉：二字体の使い分けは見られなかった。

【親鸞自筆『西方指南抄』】

・音節〈キ〉
本行：「上」（語頭）…〔｜〕
「下」（非語頭）…〔キ〕〔｜〕
振り仮名：「上」（語頭・非語頭の形態素頭）…〔キ〕〔｜〕
「下」（非語頭の非形態素頭）…〔｜〕

・音節〈ホ〉
上本：「上」（語頭）…〔呆〕〔ホ〕
「下」（語中・語末）…〔ホ〕
上末：「上」（語頭）…〔呆〕
「下」（語中・語末）…〔ホ〕
中下（本末）：語頭…〔呆〕、語中…〔呆〕〔ホ〕、語末…〔ホ〕
（中下（本末）については、語頭は「上」、語末は「下」となり、語中は「上」と「下」の両方に捉えられていたと考えられる。）

本稿の目的に照らし合わせると、次のような結論となる。

①親鸞自筆『西方指南抄』の〈ホ〉では「上―下」を基準とする仮名文字遣いがみられた。しかし、前田本色葉字類抄の〈ホ〉においては見られなかった。

②前田本色葉字類抄と親鸞自筆『西方指南抄』の両者の〈キ〉において、「上―下」を基準とする仮名文字遣いがみられた。

このように、「上―下」によって、複数の字体を使い分けるということは、「上」専用字体ないし「下」専用字体が設定されることとなる。

「上」専用字体は、その直前の文字との間につながりを持たないことを、視覚的に読者に伝える役割を持つと考えられる。「下」専用字体は、それが「上」ではなく、直前の文字とつながりを持つことを、視覚的に読者に伝える役割を持つと考えられる。

このような「上―下」を基準とする仮名文字遣いによって、文字同士の「つながり」と「切れ目」が視覚的に明らかになり、意味をもった一つのまとまりを認識しやすくなる。

なお、親鸞自筆『西方指南抄』の〈キ〉について、本行では「上」専用字体が設定される一方で、振り仮名では「上」専用字体が設定されないという結果が見られた。振り仮名は本行とは異なり、漢字に付されるために必ずしも「上」を示す必要はなかったと考えられる。

即ち、「上―下」を基準とする仮名文字遣いは、「読みやすさ」という読者への配慮を目的になされたと考えられる。

ただし、前田本色葉字類抄の〈ホ〉において「上―下」を基準とする仮名文字遣いが見られなかったことから、そのような配慮がすべての音節においてなされるというものではない。さらには、そのような配慮が個々の文献ごとに異なる可能性が高い。

このことから、本稿で対象とした資料において、扱わなかった他の音節や、同時期の他の資料について、対象範囲を広げて調査することが今後の課題となる。

注

[1]宇野(一九八六)は、これらについて次のようにまとめている。

一、和歌の書き方に関係して、『和歌大綱』、『悦目抄』、『一歩』、『男重宝記』

二、書札の書き方に関係して。『玉章秘伝抄』、『宗五大艸紙』、『女房筆法』

三、仮名文字の使い方に関して。『新撰仮名文字遣』、『和字大観抄』(三七八頁)

[2]管見の限り、特に音節〈し〉において、〔志〕は語頭に、〔し〕は非語頭に用いられるという仮名文字遣いが指摘されることが多く、その仮名文字遣いの傾向はいずれの調査対象においても同様のものが見られる。

[3]樋野(一九九〇)は〈仮名〉〈字母〉「有標の字母」「無標の字母」を次のように定義している。

仮名：いろは四十七文字の各構成要素に対応する文字論的抽象的観念

字母：それぞれの〈仮名〉に対応する具体的字体

有標の字母：〈字母〉において、読者に対し、その〈字母〉を要素とする語あるいは文字列が、意味解釈の上で注意を要するという意味での注意信号を発するという特徴を持つもの

無標の字母：同じ〈仮名〉に所属する〈字母〉で、右のような特徴を持たないもの

そして、藤原教長『古今和歌集註』を対象資料とし、二つの〈字母〉を有する片仮名において、あまり使われない〈字母〉の方を「有標の字母」とし、その〈字母〉が文脈において卓立する語に用いられるかを検討している(樋野(一九九〇)では「す」「の」「を」、樋野(一九九一)では「ほ」を検討している)。ただし、「卓立した語か否か」という判定は、樋野(一九九〇)(一九九一)の主観によるものが大きく、さらには、二字体がどう使い分けられているかという点を触れられていない。

[4]本稿において、変体仮名の異同を問わず、特定の音節を述べる場合には〈〉内に、現行片仮名を記し区別する。また、特定の変体仮名を述べる場合には〔〕内に、現行仮名若しくは字源となる漢字を記し区別する。

[5]表14の一音節語の〔一〕の一例については、次の画像の通り、助動詞「き」であり、一音節の漢字の音〈キ〉の用例にあたらない。

悟二三乗一（サトリ〔一〕サム ショウヲ）

参考引用文献

・赤松俊秀ら編『親鸞聖人真蹟集成第五巻』、法蔵館、一九七三
・赤松俊秀ら編『親鸞聖人真蹟集成第六巻』、法蔵館、一九七三
・犬飼隆（一九八九）「片仮名の成立―今後に残された問題―」（『日本語学』七六、明治書院）
・宇野義方（一九八六）「異体がなの使い分け」（『松村明教授古稀記念 国語研究論集』、明治書院）
・小松英雄（一八七四）「藤原定家の文字づかい―「を」「お」の中和を中心として―」（『言語生活』二七二、筑摩書房）
・樋野幸男（一九九〇）「片仮名文における〈有標の字母〉の提唱―および有標的効果の基盤―」（『名古屋大学国語国文学』六七、名古屋大学国語国文学会）
・樋野幸男（一九九一）「片仮名文における〈有標の字母〉の検証―藤原教長『古今和歌集註』を資料として―」（『名古屋大学国語国文学』六八、名古屋大学国語国文学会）
・前田育徳会編『尊経閣蔵三巻本色葉字類抄』勉誠社、一九八四
・安田章（一九六七）「仮名資料序」（『論究日本文学』二九、立命館大学日本文学会）

（修道中学校・修道高等学校）

別表

表1 前田本色葉字類抄〈キ〉の二字体

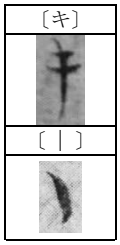


表2「巻上」、「巻下」「木」の〈キ〉二字体の用例数

	〔キ〕	〔一〕	合計
「巻上」	47(37%)	80(63%)	127
「巻下」	75(88.2%)	10(11.8%)	85
「木」	344(99.7%)	1(0.3%)	345

表3「巻上」〈キ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭	非語頭		一音節語	合計
		形態素頭	非形態素頭		
〔キ〕	1(2.1%)	7(14.9%)	34(72.3%)	5(10.6%)	47
〔一〕	10(12.5%)	27(33.8%)	42(52.5%)	1(1.3%)	80

表6 前田本色葉字類抄〈ホ〉の二字体

表7「巻上」、「巻下」「保」の〈ホ〉二字体の用例数

	〔呆〕	〔ホ〕	合計
「巻上」	112(86.8%)	17(13.2%)	129
「巻下」	69(83.1%)	14(16.9%)	83
「保」	259(95.2%)	13(4.8%)	272

表4「巻下」〈キ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭			一音節語	合計
	非語頭				
	形態素頭		非形態素頭		
〔キ〕	15(20%)	14(18.7%)	43(57.3%)	3(4%)	75
〔一〕	1(10%)	1(10%)	8(80%)	0(0%)	10

表5「木」〈キ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭			一音節語	合計
	非語頭				
	形態素頭		非形態素頭		
〔キ〕	315(91.6%)	4(1.2%)	11(3.2%)	14(4.1%)	344
〔一〕	0(0%)	0(0%)	1(100%)	0(0%)	1

表8「巻上」〈ホ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭			一音節語	合計
	非語頭				
	形態素頭		非形態素頭		
〔呆〕	18(16.1%)	45(40.2%)	47(42.0%)	2(1.8%)	112
〔ホ〕	4(23.5%)	3(17.6%)	8(47.1%)	2(11.8%)	17

表9「巻下」〈ホ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭			一音節語	合計
	非語頭				
	形態素頭		非形態素頭		
〔呆〕	10(14.5%)	30(43.5%)	29(42.0%)	0(0%)	69
〔ホ〕	7(50%)	3(21.4%)	4(28.6%)	0(0%)	14

表１０「保」〈ホ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭		非語頭		一音節語	合計
			形態素頭	非形態素頭		
〔呆〕	253(97.7%)		1(0.4%)	2(0.8%)	3(1.2%)	259
〔ホ〕	12(92.3%)		0(0%)	1(7.7%)	0(0%)	13

表１１ 西方指南抄〈キ〉の二字体

〔キ〕
〔一〕

表１２ 本行、振り仮名、左注の〈キ〉二字体の用例数

	〔キ〕	〔一〕	合計
本行	251(97.3%)	7(2.7%)	258
振り仮名	130(24.3%)	406(75.7%)	536
左注	3(11.1%)	24(88.9%)	27

表１３ 本行〈キ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭		非語頭		一音節語	合計
			形態素頭	非形態素頭		
〔キ〕	32(12.7%)		0(0%)	206(82.1%)	13(5.2%)	251
〔一〕	0(0%)		0(0%)	7(100%)	0(0%)	7

表１４ 振り仮名〈キ〉の単語内の位置による二字体の用例数

	語頭		非語頭		一音節語	合計
			形態素頭	非形態素頭		
〔キ〕	29(22.3%)		39(30%)	15(11.5%)	47(36.2%)	130
〔一〕	131(32.3%)		196(48.3%)	78(19.2%)	1(0.2%)	406

表１５ 前田本色葉字類抄〈ホ〉の二字体

〔呆〕
〔ホ〕

表１６本行、振り仮名、左注の〈ホ〉二字体の用例数

	〔呆〕	〔ホ〕	合計
本行	173(42.9%)	230(57.1%)	403
振り仮名	3(0.4%)	793(99.6%)	796
左注	1(9.1%)	10(90.9%)	11

表１７『西方指南抄』各巻本行〈ホ〉の単語内の位置による用例数

		語頭	語中	語末	合計
上本	〔呆〕	7(87.5%)	1(12.5%)	0(0%)	8
	〔ホ〕	11(25%)	25(56.8%)	8(18.2%)	44
上末	〔呆〕	10(90.9%)	1(9.1%)	0(0%)	11
	〔ホ〕	2(9.5%)	15(71.4%)	4(19%)	21
中本	〔呆〕	24(46.2%)	27(51.9%)	1(1.9%)	52
	〔ホ〕	2(16.7%)	6(50%)	4(33.3%)	12
中末	〔呆〕	6(30%)	14(70%)	0(0%)	20
	〔ホ〕	1(5%)	13(65%)	6(30%)	20
下本	〔呆〕	22(47.8%)	24(52.2%)	0(0%)	46
	〔ホ〕	10(12.2%)	63(76.8%)	9(11%)	82
下末	〔呆〕	17(47.2%)	19(52.8%)	0(0%)	36
	〔ホ〕	3(5.9%)	31(60.8%)	17(33.3%)	51